

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6ヵ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言

死ぬな！ 辞めるな！ 闘おう！

反対勢力統一の礎を築く

..... 2

◇オランダモデルと日本的ワークシェアリング(二)◇  
オランダには野党がない

「ワッセマー合意」は大政翼賛政治の産物

編集部..... 3

いじめ・不登校の原因は..... 5

— B市立Q小学校における暴力・いじめ事件の経過 (二) —

労働組合の民主化に全力を..... 8

— 連合流「自己改革」は第二の産業報国会化への道 —

腐敗、利権、ムダ排除..... 11

— 特殊法人「改革」への基本視点 —

町から働く場が消えていく..... 12

炭鉱が消えた..... 12

四〇%賃金カット..... 13

— たたかう他に生きる術はない —

読者からのおたより..... 13

# 旬刊 社会通信

NO. 822

二〇〇一年二月二日号

二〇〇一年二月二日発行  
(毎月一日・二日・三日三回発行)

## 死ぬな！ 辞めるな！ 闘おう！

反対勢力統一の礎を築く

昨夜来の秋雨は、会場に入るまで降り続いてきた。十一月三日、午後二時、新大阪東淀川勤労者センターに、近畿から多くの活動家を集めて「合理化・強制配転・民営化に反対する郵政労働者の集い」（同実行委員会主催）が催された。

七月七日の「秋田分限免職裁判一審勝利報告講演会」（七一名）以降、二回の準備会議を経て開催されたものである。わたしたち「強制配転に反対する会」も、この準備作業の工程に加わり、その成功の一翼を担った。

集いは、開会定時に始まり、最初に、全通高槻から主催者代表の挨拶があり、つづいて、旬刊『社会通信』の滝野編集長が、「小泉『構造改革』の本質と郵政合理化」と題しての講演（九五分）を行った。現代という時代の特徴と内容、そこに貫徹している基本的運動法則を抽出し、小泉政権が進む労働者への剥き出しの攻撃を整理して、闘う労働者の課題について提起した。この講演は、参加者の理論、実践両面での関心に応え、それを触発し、熱心な質疑・意見交換（大阪中郵、灘局、加古川局、西宮局）および講演後の労働者報告を引き出すことで今後の研究課題と考察への共有化を明らかにするものとなった。労働運動、組合運動は幾多の誤謬やジグザクを経験し、それを教訓化して、理論を鍛え上げ、蓄積・豊富化してきた。科学性を兼ね備えた体系として理論を思索の出発点に据え、絶えずそこに立ち返ることが求められる原則になっている。

「小泉『構造改革』と対決して闘う労働者報告」は四名によってなされた。最初に報告に立った全通東淀川の労働者組合員は、時にユーモアを交えながら、とても厳しい強制配転反対の闘いの中にある人とは思えない表情で、配転前とその後の職場の団結土壌を照らし合わせながら、労働者意識の形成はいかにあるかを考察しリアルに報告した。「抵抗とはなにも気張ってやるものではない。当たり前前を当たり前前にやるまでのことだ」と。次に、二番バッターとして演壇に立った「強制配転に反対する会」は、近畿郵政局が全国に先鞭をつけたとも言える国家意識形成のできる少数の中核部分と、その国家意志を遂行する多数の従順な双方をつくりあげようとする団結破壊装置への対抗軸をより太くし、横に連なるだけではなく、同時に、グローバルゼーションのもとで民営化を前に急速に進行しつつある分断された非正規労働者との困難な協同闘争の闘いにも自覚を促した。そして去る一〇月二三日の「アメリカの『報復戦争』NO！ 小泉内閣の戦争への暴走を許さない！ 郵政強制配転反対！ 高祖議員の辞任で幕引きを許さない！」をスローガンにした近畿郵政局への抗議デモを強調し、労働者の思想的基盤と政治的基盤向上を訴えた。政府独占資本の側は、公営企業体の民営化や現業部門の民間委託化を押し進め、その過程で労働組合の力を削ぐうとしてきた。

これに代えて、全国自治体労働運動研究会・兵庫から、冒頭で不正疑惑問題で揺れる自治体に触れつつ、現下の郵政における闘いの課題と連結する形で、「三木市学校給食パート調理員首切り・民間委託反対闘争の教訓と課題」の提示があった。

そして、圧巻だったのは、プログラム最後の報告に立った全国金属港合同労組からの不拔の労働者意識の開陳である。会場の時計は、すでに開始時刻より三時間半を越えている。倒産攻撃など様々な攻撃に耐えてきた、闘うものだけがもつある種の余裕を感じたのは僕

ひとりであつたらうか。そして、会場前列でじつとメモを取っていた京都の特定局労働者組合員の団結がなばらうで、明日の曙光とした。センターを出ると、薄暮の街は、雨があがつていた。

(郵政労働者・R)

## ◇オランダモデルと日本的ワークシェアリング(二)◇ オランダには野党がない

「ワッセマー合意」は大政翼賛政治の産物

オランダモデルへの同床異夢 連合は「ワークシェアリング検討に向けた課題整理(素案)」を十一月にまとめています。その中で、具体的施策の例として①ドイツ、②フランス、③オランダを上げています。ドイツの場合は労資合意による週当たり労働時間の短縮、フランスは法定労働時間短縮、オランダは政労資合意によるパート労働者による雇用創出です。問題はどの国を「モデル」に選ぶかです。連合はドイツのようにストライキをたたかう意思はまったくありません。日本はフランスのように労働組合が支持する政党が権力をにぎっているわけではありません。ですから、ドイツ、フランスを「モデル」にする条件はなく、政労資合意にもとづくことされるオランダ型に依存せざるをえない状況にあります。

オランダモデルについては政府・日経連や連合にかぎらず、きわめて関心が高いのが特徴です。なぜオランダの「パート導入」によるワークシェアリングが関心をひくのでしょうか。前号では五つの夢や期待、願望にふれました。さらに具体的に見てみますと、こうなります。

第一は、パート・未組織労働者の組織化をすすめる人たちで、彼らの関心は「賃金率が正規とパートで同じ」(雇用均等待遇)ということにあるようです。しかし、このことはオランダだけでなく、ヨーロッパではあたりまえのことです。

第二は、女性労働に関心を持つ人びとで、①女性の社会進出、②男女均等待遇、③家事の男女分担にあるようです。これもオランダにだけ特別なことではなく、欧米諸国では当たり前です。

第三は、インテリ女性といわれる人たちで、ある程度の収入を前提にした上で、新しい生き方、つまり家事・育児を夫婦分担し、ゆとりある生活で、生活の質を改善したいというものです。夫婦二人の二馬力で二人分の収入より、自由な時間をつくれれば一人半分の収入でも十分に「生活の質」は改善できるとの考えです。

第四は、経済学者、労働組合、政府関係者の主張で、①失業が激減した、②ワークシェアリングの有効な姿がここにある、したがって、オランダこそモデルになるとの考えです。第五は、財界です。日経連は五月「欧州雇用維持・創出の取り組み」オランダモデルを中心に欧州各国に学ぶものとの報告書を出しています。「オランダモデルを中心に」の眼目は、「企業利潤はふくらんでいる」との思惑と、ドイツ、フランス、イタリアとは違った労資関係(ストなし)が日本の労資関係(同じくストなし)が軌を一にしていることによると考えられます。

政治、労働運動は日本とそっくり 日本は外国の諸制度を移入することで、国を形づくってきました。古くは弥生時代の渡来人にはじまり、大和時代の朝鮮、中国の諸制度の導入。近現代にいたっては明治の「脱亜入欧」です。日本は「模倣の技術・精神」を世界のどの国よりも巧みにあやつり、第二次世界大戦後には「脱欧入米」を実践し、聖徳太子の隋の皇帝への親書ではありませんが、つい十年頃前には「サンライズ・ジャパン(日上がる国)」

と持ち上げられました。しかし、今は「サンセット・ジャパン（日没する国）」との評価です。それは、日本国債の評価が一日ごとに低下していることに示されるとおりです。

「模倣の精神」、さる真似は限界に達したのです。世界的な大競争の中、世界一の生産力をもつにいたった日本は、独自の文化、社会をつくり上げなければならぬ地位に登りつめたのです。こうした条件下にある日本にとって、オランダモデルとやらが本当に参考になるのかしつかりと見きわめなければなりません。

オランダとはどういう国でしょうか。歴史的にオランダと日本の関係はザビエル、キリスト教、シーボルトとしてだれもが知っていることです。そのオランダは国土・人口は九州とほぼ同じ。しかし平地面積が多く、農業・酪農の生産性がきわめて高いという特徴があります。製造業は皆無とのお国柄ですがGDPは約四千億ドルで日本の八%。一人当たりGDPは二万五千ドル（日本は四・一万ドル）です。

労働組合の組織率は三〇%弱で、労働組合の全国センターは四つで、主要組合はカトリック(FNV)とプロテスタントという二つのキリスト教勢力を中心に構成されています。

政党は左派といわれる労働党、民主的、右派の自民党、CDA(キリスト教民主勢力)、それに共産党系のグリーン・レフト(連合体)。左派・右派の勢力は均衡しているのが特徴で、七〇年代後半以降、左派政権(七七―八二年)、右派政権(八二―九四年)、左派政権(九五―)との状況です。単独政権にはおよそほど遠く、いずれも連立政権で、その組み合わせは複雑怪奇で、日本でいえば大政翼賛的政治状況といって過言ではありません。左派も右派もグリーン・レフトを除き、くつついたり放れたりのオール与党状況といって過言ではないからです。

「ワッセマー合意」―その内容 現在の日本と同じ政治状況の中でオランダモデルという「パート化」によるワークシェアリングは形づくられたのです。オランダモデルの原点は一九八二年の「ワッセマー合意」といわれるものによつています。右派政権下、労組、経営者団体、政府が①賃金抑制、②パート雇用促進(一人でやる仕事を二人で)に合意したのです。日本でいえば、一九七四年の生産性基準原理です。

当時、オランダの失業率は八・二%、あるいは一五・八%といわれていました。ところが九〇年代に入るや失業率は七〜八%台に、さらに九〇年代後半には五%台になり、現在では二・六%といわれています。EU諸国の失業率は減ったとはいえ今でも九%台ですから、オランダの急減ぶりが注目を集めるのもっともなこともかもしれません。

オランダの労資関係は独特です。労組、使用者、独立専門家からなる政労使協議会、さらに労使の話し合いの場である中央労使協議会があり、CPB(セントラル・ブティン・ビューロー)が資料を提供し、両者の「話し合い」で年次計画が策定されます。政府はこの政策を決定に移すのです。

「ワッセマー合意」はこうしてつくられました。その内容は①賃金抑制―公務員賃金切り下げ、週三八時間から三六時間への労働時間短縮、最低賃金切り下げ、②早期退職制度による社会保障―失業保障、③労働市場改革―パート雇用、民間職業紹介所の公認です。

「ワッセマー合意」の中味は、今、政府や財界がやりたいことそのものです。その背景も大政翼賛的という政治状況、さらには高失業、天文学的財政赤字と、現代日本とそっくり瓜二つです。ですから、連合、日経連、政府はオランダこそモデルといたいたいのかもしれませぬ。

(編集部・つづく)

# いじめ・不登校の原因は

—B市立O小学校における暴力・いじめ事件の経過(二)—

## 診断書

一月二三日 丙、A心療内科で診断書を受け取る。病名「急性ストレス障害」

## 記

「上記にて当分の間はストレスの原因となるような状況(例えばトラブルのあった相手との同席など)から離れておくことが必要と考えます。」

一月一三・一四日 丙がB市教育相談センターの所長に電話し、「カウンセラーのI先生が甲のカウンセリングの内容を他人にもらしたことはない」との所長答弁を引き出し、したがって、「乙の要請書の反論をI先生が人にはなすことはないですね」と丙が聞き、「そうですね」と所長は答えた。

## 保護者懇談会

一月一四日 一九：〇五〜二〇：五五 Q小三階図書室で、三年生全体の保護者懇談会、学校主催、出席・保護者四七人位、乙以外はすべて母親。学校側・校長、教頭、三年一組担任・K教諭、同二組担任・養護教諭の五人。

校長から経過報告—「甲君が九・一から学校に来にくくなっている。その原因として両親からS君との関係で来にくくなっているとお話があり」と九・一の様子、九・三〜七母親付き添いで保健室ですごす、次の週、九・一〇から一二まで三年のオープンスペースで過ごす、その後一〇・二三まで休み、一学期末にゲーム攻略本の引つ張り合いでSとトラブル、一学期の係活動で数人から暴言、九・二七に学校で両親のカウンセリング、一〇・一に担任が家庭訪問で朝学習のときのSとのトラブルの話を聞いたとして、

①一学期の係活動での甲を含む遊び係に対し、「殺すぞ」というような暴言を吐いたことについては、学年懇談会ですでに担任からお話した。

②朝学習前後のトラブル—二学期になってから学校で聞き取りをした。Sがチャイムの鳴る前に連絡帳に書いていた。係の甲が「今はそれをする時間ではない」と注意したらやめなかったので、甲がSの机をゆすつたら、ノートに字がずれて書かれてしまった。そしてSが甲の机に行つて、ノートに鉛筆で落書きした。近くの女の子が見ている、二人ともノートを消し終わったところで、甲がSのところに行つて足を蹴った。Sは甲をゲンコツでたたいた。そしてチャイムが鳴ったので朝学習をした。

ところが甲の肩のあたりに鉛筆の跡が残っていたというが、Sは「ゲンコツの手に鉛筆があつたかもしれない、しかし意識的に突き刺したわけではない」と言っている。いつの日の事かよくわからない、担任が出張中だったかもしれない。

③ゲーム本—甲が友達から借りたものが—ひっぱりあいになった。そのとき一緒にいた友達がいる。Sが甲を押して机に当てたと言っているし、甲はおなかをたたかれたとお母さんに言っている。いずれにしてもはっきりしない。甲がワーと泣いて帰っているのを甲のお母さんは目撃している。Sのお母さんが乙さんのところにSを連れて行き、Sにあやまるように言った。そして一〇・三付けで校長宛に乙から要請書が出された。

「いじめ」かどうか、学校側は迷っていた。そしたら市教委から「された側がいじめと

感ずればいじめとなる」ということだった。この場をお借りして、乙さんにおわびしたい。Sのご両親も心配され、五日間登校自粛をされ、甲君は保健室に登校し、本人の希望する活動をしてきた。

一〇・三一に甲さんのお母さんSさんが登校されたのを確認し、以降、登校されていない。この間、担任が甲宅を訪問し、一緒に学習し、学校との関係を切れないようにしているが登校されていない。

いじめ問題解決のため、甲君の登校しやすい環境作りのため懇談を。

## 司会

司会の教頭から、一一・一にSが欠席し、甲が出席し保健室で額縁作りをしていたことを訂正。

事実関係を聞かれ、乙からゲーム本破り・暴力事件の時は（その前の時もだが）、Sさんから甲宅にあやまりに来られたのではなく、乙からSに行つたと訂正（これはSの母親も「仕事に行っていて知らなかった」と）。

朝自習前後の事件では、家庭訪問時に乙・丙ともK教諭から「甲君は泣いていました。女の子が『甲君泣いていたよ』と言っていました」

と聞いていたと反論。K教諭は、甲に「Sから刺された？」と聞いたら「忘れた」と答えていた、と（！）。

「クラス替えはそんなにできないのですか？」という参加者の質問に、司会の教頭は「えー！S君だけのクラス替え!？」ととぼけて、びっくりしたような声をあげ、「全体を替える事は学期の途中でなし、甲君を隣のクラスにとりかえようという声もあるし（！）」と、ある意味ではこの日の具体的議論の中心だとお母さんの間で言われていたクラス替え問題を、はぐらかし消し去ってしまった。この教頭によって、ひどい懇談会にしてしまった。

たまりかねて、A心療内科の甲の診断書を全体の場で初めて報告したが、校長からは、

①まず、保健室でSと合わない状態を作る。

②小さな集団で、甲が心を癒せる中ですごし、

③大きな集団で、甲が学校生活を送れるようにする。休み時間には、しつかりパトロールする。

学校としては二人に登校してもらいたい、クラス替えはしないという、以前よりもずっと後退した内容に終始。教頭の恣意的な司会が目についた。

乙からは、「校長は『順次、甲君に集団で慣れてもらう』というが、S以外の人には何の拒絶症状もなく、『Sには近づくな』という診断書だ」と何度か反論し、「甲には（小集団でSと別の教室になる）一日一回の算数の授業しか受けられないということですか」と聞いても、同じ答えばかり。

（この中で一番専門で、カウンセリングの勉強もされた）養護のN先生が「本人次第」と様な意見質問に答えた。

最後、司会の教頭は「クラス替えはしない。甲君が明日から登校する決定的なものはない。」と。

校長のまとめ「いつか甲君もわかってくれる。」

（仲良くする）などというだれも否定していない、長期的な課題をわざとぶっつけてくる。甲の主観的な思いではどうにもならないSの暴力といじめによる障害と医師の緊急の指示をこちらは診断書も示しながら言っているのに、悪質な懇談会運営とまとめだつ

た。

### 正規授業

夜、帰宅後、乙がQ小に電話し、明日の算数の小集団の時間割と教室を聞く。担任・K教諭が「他の時間は同じ教室で甲君とS君は端と端で」と言ったので、電話を切る。

一月一六日 Q小二校時目、甲が二カ月半ぶりに正規授業を受ける。Sとは別教室になる算数の小集団授業、先生も別のG先生。母親が後ろの席に付き添い。

午後六時過ぎ、担任・K教諭が「あれだけ言われてたのに同じ教室の端と端でとってしまってお父さんを怒らせて申し訳ありません。」と、来週一月一九〜二二日の「少人数学習の予定」という算数以外、国語も書写も理科も、約二〇時間中一二時間も小集団授業のある異例の時間割を持参。「本人が希望するなら体育も」と。

他の授業は甲の個人授業でとK教諭が言うので、Sを個人授業にして甲を普通の授業を受けられるようにしてくださいと丙は要請した。

※この日から友達が毎日遊びに来てくれたり、これないときは連絡をもらえるようになった。

### PTSD

一月一七日 朝から甲は「頭が痛い」と、頭を冷やし、Q小二校時目の「ビデオ鑑賞」(小集団でSは別室)の授業を受ける。母親が予告せずに登校したら、教頭が「ちよつと待ってください」とばたばた走って行って用意。

※乙が講談社二〇〇一・一一・六発行『大安心―健康の医学大事典』を見ると、「急性ストレス障害」の項で、「PTSD(心的外傷後ストレス障害)の「はつきりした慢性的な障害のない場合」がその病名となるということ、PTSDは「受傷後、数週から数ヶ月の潜伏期間をへて発症」とある(六〇八〜九ページ)。したがって、Sの父親が鬼の首を取ったように「だったらなぜ夏に花火して遊んだんだ(不登校の理由は別にある)」といったことのわけもよくわかる。

### 校長

一月一九日(月) 甲はQ小四校時の理科の小集団(三年一組を二つに分割)の授業を受ける。

一月二〇日(火) 甲はQ小二校時目算数の授業を受けるべく、母親の運転する自動車でQ小駐車場まで来たが、降りなかった。甲は「頭が痛い」という。

一二:二〇〜四五 A心療内科で三回目の受診。A医師より「しんどかったらお母さんに言っ、無理して学校に行かなくていいから」と言われる。頭の痛み止めの薬の処方箋をもらう。

夜、甲に両親が聞くと、「学活とか社会とかに出たい」という。もう教室に戻って、フルコースの授業に出たいのである(もちろん当座はならし登校として最初から最後までは出れないにせよ)。それを「算数とか国語とか小集団の授業だけ出る」と言われてもいやになるのは当然だ。

一月二一日(水) 午前九:三五に乙が自動車で丙と甲をQ小に連れて行く。駐車場降りるところを昇降口の校長が見てどこかへといなくなる。三年一組の教室に向かうところで、クラスの半分の児童が移動中。S君にも廊下ですれ違う。小集団の国語だったは

ずなのに、九：四〇で授業開始されているはずなのに、乙親子を見て急いでクラス分割して移動させたのではないか。このままでは甲がいろいろ言ってくるから、みんなが振り回され迷惑するということになってしまう。

### 怪電話

丙帰宅。乙つきそい。九：四〇～一〇：二〇の間、チャイムが鳴り授業終了まで、甲は教室と廊下の境に立ったまま動かず、父親、担任、養護・N教諭、校長が交互に話し掛けても何も返答せず。

K教諭が「甲君は何をしたいのかなあ」と言うので「甲は学活とか社会とか出たいと言っています」と乙が言うと、「それでは来週カリキュラムを組んで見ます」と担任・K教諭からの返事。

父親と甲が保健室に移動。N先生と色紙作りを一時間する。給食食べずに父と帰宅。

一二：〇〇～一二：三〇 カウンセラー・オガタを名乗る怪電話。

一月二三日（木） 一校時目の終わり頃、甲は母と三年一組の教室にカバンを置き、「キックベースをしたのでグラウンドに行きます」と断り、保健・N先生と三人でグラウンドへ。二校時目は体育だったので三年一組の半分は、キックベースに回って、他の半分は既定の鉄棒をした。鉄棒組にS君は入っていた。教師はK教諭。キックベースはN先生。

甲は一時時目の終わりに三年一組にはいつていつたとき、「隣の教室にS君がいた」とあとで母親に言つて気にしていた。

## 労働組合の民主化に全力を

—連合流「自己改革」は第二の産業報国会化への道—

### 歴史の回帰

「平和憲法体制」は岐路にある。いや、すでに「戦争体制」への舵を切ってしまったのかもかもしれない。「アフガニスタン戦争」で旭日旗を翻し、軍艦が横須賀、呉、佐世保の軍港から出撃してゆく。それを日の丸をもった家族たちが見送り、テレビは「英雄的行為」とでもいうかのように、映像を流しつづける。そればかりか、大商業ジャーナリズムは「テロ根絶のためには当然」と参戦法を賛美し、「タリバン後のアフガン復興に全力を上げよ」と政府の尻をたたく。

アフガニスタンには「アルカイダ、ビンラディンを支援するタリバンをやっつける」と、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、オーストラリア、カナダ、日本等が出兵した。貧しい周辺の国々はむろん、旧ソ連邦の新興国家、旧東欧の国々まで「援助」欲しさにアメリカに媚（こび）へつらう。二〇世紀冒頭、一ヶ国の欧米列強が中国の義和団鎮圧に兵を送ったことが頭をよぎる。世界は二〇世紀という「戦争と革命」の時代を経、再び帝国主義戦争の時代を迎えつつあるのかもしれない。歴史の回帰である。

### 労組は「自己改革」を強調

これと同じことが労働運動の世界にも起きている。労働組合が危急存亡の危機を迎えていることだ。組織率は減少し、社会的影響力は皆無となり、賃金・雇用・労働条件は資本家の言うがままで、労働組合の存在感と存在価値は地に墮（お）ちてしまった。



かつて、民主化同盟という組合改革運動が一九四八〜五〇年にくり広げられたという。第二次世界大戦前まで、労働組合は「赤だ」と、徹底的に弾圧された。しかし、一九四五年八月一五日の大日本帝国の崩壊の結果、労働組合が燎原の火のように拡がった。共産党系の労働組合が中心となった。共産党の「引き回し」に対し、若い組合活動家たちは「組合を労働者の手にとりもどせ」と「民主化同盟(民同)」をつくり、組合民主化運動を展開した。

「民同」運動に参加した人びとは玉石混交だった。共産党・共産主義はいやだという人、今の組合運動は「ふつう」の組合じゃないという人、科学的社会主義の理論の真の実践が必要という人、といったように。その民主化運動のなかで一九五〇年、総評が結成され、戦後労働運動は出発した。総評はニワトリとして結成された。しかし、アヒルになった。総評結成後、「ニワトリでありつつけたい」という人が、アヒルに変身した総評の「民主化運動」を展開した。お伽噺のような高成長がニワトリたちを励ました。大きくなった総評にも官僚主義、機関決定唯一主義の弊害が巣くっていった。

三池闘争(一九六〇年)、生産性基準原理の提唱(一九七四年)、プラザ合意(一九八五年)と中曽根第二臨調と労働戦線再編成(一九八一年以降)で、アヒルは再びニワトリに回帰させられた。一九八九年のユニオン連合結成である。

今、そのユニオン連合に「組合運動の自己改革」という名の組合民主化運動がおこっている。労働組合の存在感のなさが、墮落、腐敗しきった大幹部にもある種の危機感を抱かせたのだ。労働組合はニワトリではだめで、アヒルでなければならぬことの歴史の判決だ。

## 連合のいう「自己改革」

連合は「自己改革・自己革新」で、どのような組合運動をめざすのか。三つのことが第七回大会運動方針で示される。

第一。新しい時代を切り開くと、①企業別組合の弱点克服、②あらゆるレベルで参加追求、③政党との新しいあり方を強調する。しかし、その内容は①すっかり資本によって壊されてしまった企業連に代わり産業別形成を促進する、②「抗議」から「要求」へ、さらに「参加」へと、政労資の合意形成、ちなみに昨年まで「抵抗」という言葉が使われていたが「抗議」にすり変わった。「抵抗」ではテロを想起させるというのだろうか。③民主党はたよりにならん、自民党ともというものだ。

こんな「自己改革」がなにをもたらすかは後に述べる「参加」のモデルケースである。一〇月の日経連との「雇用にかんする社会合意」(本誌第八一九号参照)に示される。

第二。労働を中心とする福祉社会が目標と、①雇用の創出・安定、②ワークシェアリング、③新しいワークルールを提起する。この内容がすでに指摘した日経連との合意だ。

第三。雇用を守るのが労働組合の責任と、①組織拡大、②非正規労働者の組織化で組合の社会的影響力拡大を強調する。組織拡大に連合予算の二四%(九億円)、人員の三〇%を投入するばかりか、産別組織にも予算の一〇%投入を呼びかけてる。非正規労働者の組織化についてはカケ声だけとの印象だ。

会長の笹森氏は頭より口がさきに開く人、事務局長の草野氏は事務官僚とともに大企業労組出身。彼らは労働運動の歴史的役割について、夢も歴史観も稀薄である。その彼らが推進しようとする「自己改革」論の典型が「参加」、とりわけ一〇月一八日に日経連との間に結ばれた「雇用に関する社会合意」だ。

## 「ベアゼロ」で春闘は終焉

この合意は①雇用の維持・創出に関する社会合意の推進、②政府に対する要請と政労資による社会合意形成の推進の二項目からなる。ポイントは第一項、こうである。

「(一)、当面の施策として―①経営側は、雇用の維持・創出し、失業を抑制すること、②労働側は、生産性の向上やコスト削減など経営基盤の強化に協力するとともに、賃上げについては柔軟に対応すること。」

(二)、雇用の維持・創出を実現するため、日経連・連合は多様な働き方やワークシェアリングに向けた合意形成に取り組み、労使は雇用・賃金・労働時間の適切な配分に向けた取り組みを進めること」

経営側は「失業を抑制」し、労働側は「賃上げに柔軟に対応」というのだ。この方針は二〇〇二年度の連合の「春闘方針」で、こう決定された。

「連合の統一要求基準は『賃金カーブ維持分(定期昇給見合い分・筆者)プラス $\alpha$ 』とし、 $\alpha$ は部門の調整のうえ各産別で決定する」

新方針の意味するとは何か。ベア要求が放棄され、結果、統一要求基準が実質放棄されたことだ。もつとはつきりいえば「雇用のためには賃金要求はいたしません」としたことだ。これまで「春闘改革」がいわれてきた。昨年春闘では「春闘は曲がり角を曲がった」と、正規労働者中心から非正規労働者を包む運動への転換がいわれた。そして今年は「ベア要求なし」である。春闘は実質なくなった。

## 日経連・連合はさらに一体化

日経連は連合のこうした方針に手放しで歓喜する。「雇用で社会合意を推進しよう」と題した日経連タイムス一〇月二〇日付主張(本誌第八一九号参照)はこう述べる。

「すでに、日経連、連合は、二年前の平成一一年一〇月、雇用の維持・創出を図るために労使『雇用安定宣言』を合意している。

そこでは、雇用安定に向け、労使それぞれ自らの社会的役割を果たしていくことを確認したが、一般の合意はそれをさらに発展させ、労使課題への最大限の努力の傾注と政府に施策の充実を要請することとした。

とりわけ、当面、足元の対処として、経営側は雇用の維持・創出、失業抑制を、労働側は生産性の向上、コスト削減など経営基盤強化に協力し、賃上げについては柔軟に対応することを表明した意義は大きい。

二年前には、連合は労使協議を前提に経営基盤強化への協力を宣言したにとどまったが、一般は、賃上げ問題への柔軟な対応という姿勢を明確に示した。すでに、連合は合意を前提に、中執委において、来春闘では統一要求基準として『賃金カーブ維持プラス $\alpha$ 』にとどめる方針を決め、昨年の『純ベア一%』要求とは異なる考え方を打ち出している。

当面の対処とはいえ、中央のレベルでは『賃上げより雇用を』という労使の合意をみるに至ったわけである。今後の労使交渉において、雇用安定を最重要視し、合理的な賃金決定をめざす新たな展開が期待される。同時に、一般の合意は、国際競争の強化、高コスト是正というわが国産業の至上課題の実現に資するものと評価されよう

解説は不要だろう。連合は日経連とさらに一体化した。このような「参加」が自己改革というなら、それは新たな「産業報告会」化である。こうして、連合流「自己改革」は新たな政労資一体化へと労働運動を導いていく。

## 腐敗、利権、ムダ排除

―特殊法人「改革」への基本視点―

政府・与党は特殊法人「改革」について、「先行七法人の改革の方向性について」（以下「方向性」と略記）をまとめた。その内容は①道路四公団（日本道路公団、首都高速道路公団、阪神高速道路公団、本州四国連絡橋公団）は民営化、②住宅金融公庫、都市基盤整備公団、石油公団は廃止というものだ。特殊法人は全部で一七七あるという。そして、そのほとんどが財政投融资あるいは国家予算から関連省庁を経由し、手厚い財政保護が加えられてきた。

特殊法人改革でもっとも重要なことは、①腐敗、②利権、③ムダの排除である。この三つを象徴するのが「特権官僚の天下り」であることは衆目の一致するところだ。しかし、この点について「方向性」には一言もふれられてはいない。特権官僚が特殊法人をいかに食い物にしているのか。「方向性」が民営化、廃止をうちだした七法人についてみてみよう。

まず常勤役員である。道路四公団では常勤役員八人中六人、首都高速は七人中五人、阪神高速は七人中三人、本四連絡橋公団は七人中六人と、常勤役員二九人中じつに二〇人にも達する。トップは次官級、他は局長級人物だ。住宅金融公庫では常勤役員九人中六人、都市基盤整備公団では一四人中九人である。これらの事情は特殊法人がいかに政官の食い物にされているかをあらわに示す。

さらにすさまじいのがその年収だ。最高は住宅金融公庫の二六一三万円、最低でも本州四国連絡橋公団・阪神高速道路公団の二五三七万円。これは各省庁の次官（二五八一万円）の給与を基準にしていることは明らか。

しかも、彼らは渡り鳥。公庫、公団の事業に決して責任をもつわけではない。二年、長くて四年で次のポストに渡る。そして年間収入分以上の退職金をポケットに入れる。こうして、三つも四つも渡り歩き、一億円以上もの退職金を懐にしていける。

現場労働者の賃金は四〇年勤続者で多くて一千万円前後、平均では五、六百万円。退職金は二千万円強、中小では涙金。だから、特殊法人改革ではこの点が改革されねばならない。

次ぎに問われなければならないのは従来型の公共投資のあり方だ。地方に行くとその町の人口以上を収容できる「ハコ物」が林立している。東京だってそうだ。旧都庁跡地に東京国際フォーラムという、ガリバー旅行記を想像させる船のようなかたちをしたヘンテコリンな建物が新幹線からながめられる。

一番でかいホールは五千人を収容する。その利用状況はと見れば、当然、未利用日の方が多い。維持費に年間、数億円、人件費等を加えれば二ケタの億に達するに違いない。こんなムダをやめることだ。

第三は民営化して本当にプラスになるかだ。民営化でなにか一つプラスにならないことは、国鉄（現JR）、電々公社（同・NTT）、全専売（日本たばこ）にも明らかだ。民営化の結果、儲かるところは便利になり、駅舎はモダンになり、新車両が続々投入される。しかし、儲からないところは「切り捨て」が待っただけだ。

価格政策も巧妙になった。JRでは民営化してから運賃値上げはしていないという。はたしてそうか。急行は廃止され、それに特急列車が代わった。料金は高くなった。その典

型が新幹線だ。こだま、ひかりの二本だてだった運行体系はこだま、ひかり、のぞみの三本立てに変わった。こだまは区間列車となり、ひかりはこだまに代わり、のぞみはかつてのひかりと変わらない。しかし、のぞみには一定の料金が上乘せされる。

国鉄民営化で最大の課題とされたのが、赤字解消だ。しかし、その赤字は国民に転化され、株式、不動産売却でもその赤字は減るところかふえつづけている。そして、北海道、四国、九州、貨物の四つの会社は株式上場のメドすらついていない。これらは当初から予想されていたことだ。

## 町から働く場が消えていく

新卒高校生の就職内定率が九月末でわずか三七・〇%（前年比マイナス五・五%）という。新卒高校生で就職を希望するものは二十二万二千人、これにたいし求人数は十八万五千人で、求人倍率は〇・八三%となる。就職したい若者のうち、出発点で四万人に門戸が閉ざされているのである。

内定率が三七%だから、内定者は就職希望者二十二万二千人中たったの八万二千人あまりにすぎぬ。地域別では東海地方の五六・六%がもつとも高く、もつとも低い北海道ではなんと一四・九%である。

この数字の意味するところはまことに重大だ。若者から将来への夢が奪われているからだ。街の中小商店には「フリーター募集。時給八百五十円」との広告が目立つ。フリーターという不安定職、じっさいは失業者という「職」しか仕事がない。

世界的な大競争時代にあわてふためく企業は「人をどう育てるか」の理念を喪失し、「どう安く使うか」だけが関心事となってしまった。日本には国家的な職業教育訓練の機関はない。「人口」で就職から閉め出されてしまった若者はこうして「フリーター」という失業者として人生を終える他なくなってしまふ。

他面、高等教育も荒廃する。「就職したかった。しかし就職口がない。だから大学、専門学校に行かざるをえない」と。こうして教育は荒れ果て、若者の気持ちはすさんでいく。新聞には連日、「リストラ」の記事が伝えられる。工場の統廃合、そして中国への工場移転がその中心だ。東京には本社ビルが林立する。しかし、大企業の工場はほとんどない。大企業を支えてきた九州、四国、東北、さらには中国、近畿地方から工場が次から次へと消えていく。そして今では市町村、N T T、郵政職場。さらには信用金庫、信用組合という金融機関が。これが北海道の就職内定率一四・九%との数字である。

## 炭 鉱 が 消 え た

石炭は第二次世界大戦後、日本産業復興のシンボルだった。「黒いダイヤ」が高度成長の担い手となった。「石炭から石油」の産業構造の変化が、石炭産業を直撃し、一九六〇年代以降、北海道、九州の屋台骨を支えたヤマが次から次へと姿を消した。

二一世紀、日本に最後に残されたヤマは二つだった。北海道釧路市の太平洋炭鉱、そして九州長崎県の池島炭鉱だ。池島炭鉱が十一月二十九日に閉山となった。これで日本に残る炭鉱は太平洋炭鉱のみとなる。その太平洋炭鉱も来年一月末で閉じられる。日本から炭鉱がすべて消え去る。両炭鉱ではそれぞれ一千人の労働者が解雇される。石炭需要はふえて

いる。一九六六年には五千五百万トンだったのが、今年は一億四千万トンというように。政策のあり方が問われている。

## 四〇%賃金カット ——たたかう他に生きる術はない——

ある民間大企業の学習会での話。本体に残る業種と分離・別会社化される業種の仲間が、「これからどうたたかっていくか」との合同学習会に参加させてもらった。

分離・別会社化される業種の労働条件は賃金二〇%カット、ボーナス一・四ヶ月分カット、それにさまざまな手当が全廃というすさまじい切り下げだ。これまでは、会社の提案は「通つてしまふ」と考えていたが、「今度の合理化提案は見過ごせない。たたかわなければ」と、本体組合員と話し合うことになったという。

分離・別会社化される業種の賃金は従来の賃金の四〇%カット。年収八百万とすれば四百八十万円になる。もちろん税込み。手取りは四百万円にも満たぬことになる。

## ◇読者からのおたより◇

**揺れる沖繩** 少ないですが、おつりはカンパです。アフガニスタン情勢でNHK、朝日放送とも何か変、小泉、真紀子の報道についてもまったく関心はありません。沖繩に観光客が来ないのは当然かも。なぜ沖繩に行くのが恐いのか、考えるキツカケになればと思います。(沖繩・S)

**編集部より** カンパ、多謝。現代ジャーナリズム最大の欠陥は、その日暮らしであることです。新しいネタがすべてで、長期的に考えることを視野に入れておりません。だから群れて流れる雰囲気をつくるだけ。基地の県沖繩、米軍の撤退がなければ、沖繩にはこわくて行けないでしょうね。

**不安** 新社会党のことだけでなく、社民党関連をもっと増やして欲しい。大衆行動の再構築こそ緊急の課題。大衆行動に影響力を拡大するためには社民党の強化でしかないと思っています。あまりにも先鋭化した新社会に不安。(佐賀・M)

**編集部より** 新社会党が「あまりにも先鋭化している」とのご指摘、なにか違和感を覚えます。旧社会党の分裂・解体にあまりにもとらわれすぎていらつしやいませんか。現在の政治状況を冷静に分析して、全体を考えることが求められているように思うのですが、私はいつもこう話しています。ウサギのように耳を長くして生きた情報を集めよう。フクロウのように冷静に情報を分析しよう。タカのように爪を研ぎ、蛇のように巧みに相手に接近し、反撃の機会を準備しよう。地域・職場に大衆行動をつくり拠点をつくることです。

**冬將軍** 転居しました。北海道は早くも冬將軍です。(北海道・S)  
**編集部より** 十二月半ば旭川↓名寄↓札幌↓占冠と旅します。Sさんのところには今回は寄れません。残念。

**まずは健康** 困難な状況の中をよくぞ屈せず、敬服の他なし。それにはまず健康(静岡・T)  
**編集部より** Tさんもご健勝のようす。激励に胸が熱くなります。私もすでに五六。ここ二―三年に人生のすべてをかけるつもりでがんばります。さらにご支援を。

**決意を新たに** 老父が車椅子を使用するようになってから、二度目の年越しを迎える。介護の日々の限られた時間、情報源として、とりわけ「社会通信」が役立ち、車椅子のポケットに常備している。来年には前身の「進路」をスクラップしたいと思う。改憲・参戦策動が激化する今、これに抗すべく、新年への決意を新たに、山川均著『社会主義への道』も手にしている。(沼津・T)

**編集部より** 介護問題は深刻な社会問題です。私のところも母(介護5)、妻の父(介護1)。常に心にひっかかっています。お大事に。

**「たたかう会」でがんばる** たたかう闘争団を反組織的だとか、四党合意に反対する支援者達が解決を遅らせている等々機関役員は大合唱・差別・選別そして分断の道へ? 国労綱領をしつかり守り、路線転換を許してはなりません! 「たたかう会」拡大に全力で取り組みます。会員拡大に向けて学習会・集会を多く企画します。力になって下さい。(神奈川・A)

**編集部より** 「たたかう会」全国で力強く前進し始めました。「国鉄闘争を風化させてなるものか」「一五年余の闘いをムダにしてはなるものか」との雰囲気形づくられてきたとの強い印象

です。神奈川の地でもがんばって！ いつでも声かけてよ。

「横と連絡とれ」というけれど、ご丁寧に激励のお便りいただきありがとうございます。社会通信いつも切実な思いで読ませていただいています。八一九号の京都のF子さんの声を、若者のやる気が生かされない職場環境、わが郵便局も同じような空気が流れている現状です。滝野さんの言われている横の連絡を取り合う大切さよくわかります。ただ今の私には一挙に何かが出来るほど具体的なイメージがわいてきません。とりあえず声を出し続けること。それだけです。(草津市・M)

編集部より おっしゃるるように声を発しつづけて。そして回りの声に耳傾けて。やがて、横との連絡のイメージがわいてくると思います。

「地域ユニオン」てなにに 次の要領で「地域ユニオン」学習会をおこなうことになりました。出口が見つからない不況が長く続いている中で、「パートで働いていたが会社から何も説明がなく首になった」との声が続出しています。がんばっているのが「地域ユニオン」。そこで「地域ユニオン」とはなにか、「二重加盟」とは、が主な問題意識です。(山梨・C)

編集部より 先日にも奈良の読者から地域ユニオン立ち上げましたとの報告をいただきました。全国的にこうした動きが力を増しています。労働運動強化はまず地域の交流から。

賃金四%カットは撤回へ 都労連六単組十万人の秋闘は大衆行動(六波)、座り込み等の闘いで賃金四%カットの三年目は阻止。成績率の係長級導入は残念。しかし、賃上げ阻止は大きな成果。あの石原知事ゆえ、今後も油断はならない。組合活動を高めよう。(自治労・Y)

世の中どうなる 親は一介の労働者なのに、倅は、陶芸の芸術家？ 先日、二人で話したら、経済も、社会も、文化も予想できない変化すると言う。(しが・K)

編集部より 私の身内も親とは違った職業ばかり。ほぼすべてそろっています。自然科学に社会学、それに芸術家も。どこも人間関係、社会の動向で悩むのは同じのよう。

忘れ去られた組合民主主義 「一人はみんなのために、みんなは一人のために」。労組一年生の時に習った言葉。リストラ・五%台失業・能力主義で、運動材料は山積み。一方、組合費悪用事件も。「構造改革」は行政の専売特許ばかりではなさそう。マイナス感や閉塞感を腰貯めにして本流がどう流れるべきかを考え、真つ当な議論で方向性の確認できる「絶好のチャンスに転化したい」。(帯広・K)

編集部より おっしゃるとおり。労組の「民主化運動」の時代。行革反対と労組民主化をどうおこなうか。おもしろい時代の始まりかも。

「日の丸」の押しつけ 九月は本会議に続き、民生に決算の委員会と議会三昧の日々でした。幹事長会で自民党が「議場に日の丸」を提案。反対する多くの議員を無視して、日の丸を押し付ける厚かましさに呆れるばかり。市政のチェックにこそ頭を働かせてほしいと私は願うのですが。以前、向田茨木市連合自治会長がローズ・ワムの竣工式で「日の丸・君が代」で起立しない私に「日本人ではない」と発言、私が注意したことがありました。この「非国民」発言や、靖国、復古調の「新しい歴史教科書」などに見られる偏狭な考えが、侵略戦争を引き起こし、アジアや日本の民に辛酸をなめさせられた。多様な考えを認めない固陋で「日の丸・君が代」「愛国」を押し付ける人のうさんくささは昔も今も変わらない。(茨木市議会議員・山下けいこ)

「面白い本」あります 「反動の年二〇〇一年」も残り一ヶ月。誌代が十月で切れてしまいました。が、必ず送金致します。No.八一七号で編集長が面白い本がないとのことを記しておられました。

「この国のゆくえ」梅田正己著(岩波ジュニア新書)は一読する価値があり！ 靖国と歴史教科書問題を中心に、この国の反動勢力の台頭に警鐘をならしている。また、雑誌『世界』(十一月号)特集、報復の戦争に反対するもせひ読んで欲しい。私は、岩波書店の(スポークスマン)ではないが、岩波書店の健闘ぶりに敬意を表したい。編集長もご自愛下さい。(埼玉・O)

編集部より 嬉しいお便りありがとうございます。Oさんのような若者と私たち中高年とは本の読み方、選び方が違うのかも。今日も本屋を歩いています。さらに教えて。

制服アンケート調査 先日、局内で郵政公社になったときの制服アンケート調査がありました。三種類の試作品を見て判断するのですが、外務の制服はどれも制服というより、トレーニングウェアのようなもので、職員の評判は悪かったです。これを着て、走りまくって働けというのでしょうか、公社後の郵政の姿が想像できました。(京都・K)

編集部より ヘー、制服のアンケート調査ですか。庁は目立つかつこうをさせたい、駆け足で働かせたいとの意思ですか。クロネコの制服をまねているのでは？

川柳一句 国労よまだ引き返せるぞルビコン川、幻想と思ひ知らされても まだ捨てられず、激励団前は歓迎今恐怖、かわる時間聞いてはいたがこまでやるとは。(長崎・東光)

編集部より 私も一句詠みました、と届けていただいたものから四句選んでみました。「激励団前は歓迎今恐怖」は国労組合員・闘争団の今の気持ちがよくわかるとの印象です。これじゃ勝てない。さらに気力と気迫で歓迎して。